

(PP1)一般社団法人 丹波・タンボフ交流協会 活動報告

(PP2)ロシア連邦タンボフ州タンボフ市:モスクワから南東約400kmにあり、現在は人口30万の地方都市

(PP3)協会設立に至る経緯①志水通男さんのタンボフ訪問

きっかけとなった人:志水通男さん(現・当協会理事)一兵庫県警を定年退職、神戸市在住
志水さん平成26年(2014)9月のロシア・タンボフへの初訪問

(PP4)【志水さんのタンボフ訪問へのいきさつ】

平成26年3月、志水さんの携帯電話に突然、兵庫県生活支援課の恩給援護班の方から電話がかかってきました。

志水さんのお父さんは2012年に91歳でお亡くなりになり、てっきりお父さんの軍人恩給の打ち切りの話だと思われたそうです。しかし係員の「ロシアの女性から、68年前にあなたのお父さんから貰った写真を本人か親族に返したい、と外務省・厚生労働省を通じて連絡がありました。写真のコピーを送るので確認してください。」とのことでした。

志水さんのお父さん實一さんは大正9年(1920年)12月宋栗郡一宮町でお生まれになり、昭和14年(1939年)12月の19歳のとき、志願兵で陸軍歩兵部隊に入隊し半年後に満州へ赴任されました。そして5年後の昭和20年(1945年)8月の24歳で終戦を迎え、2年間のソ連抑留生活(タンボフ)を送り、昭和22年(1947年)10月の26歳のときに帰国されました。

兵庫県生活支援課からお父さんの写真コピーが届いたそうです。封筒の中にあった、厚生労働省の手紙には「ロシア連邦タンボフ州に在住する女性が10歳の頃、タンボフの収容所に連れてこられた日本人(シミズ・ジツイチ)と知り合い、本人の写真を貰ったが、写真を本人又は関係者に返還したいとして外務省を通じ依頼したものである。」とのことでした。後にお父さんの現物写真が届き、その写真を持っていた78歳のロシア人女性の写真、露日協会タンボフ支部長の写真と名刺と手紙などが入っていたそうです。そしてタンボフ支部長の手紙には「お父様の写真を持っていたのは、1946年(昭和21年)当時10歳だった女性で、名前はエミリヤさんです。彼女は、お父様と仲間の兵隊さんと交流して、とても温かい思い出を持っています。エミリヤさんは是非この写真はご親族に渡してほしいと望んでいます。」などと書いてあったそうです。また「2014年9月にタンボフ市で日本大使館が協賛の第4回日本映画祭を開催するので来賓として参加してほしい。」とも書いてあったそうです。

さらに日本大使館からロシアの記事が添付されたメールがきたそうです。記事は30年ほど前のロシア内務省の警察官僚によって書かれたもので、志水通男さんは内容を読まれて、「父・志水實一の名前入りで日本の兵隊さんグループと10歳の小学生グループの交流をほのぼのとした描写で書かれており、また、日本の兵隊さんはみんな、親切で、礼儀正しく、勤勉であり、捕虜にもかかわらず自信を持ち立派に振る舞っていた。このことは周りの人たちをひきつけた。などと、捕虜であった

にもかかわらず好意的に書かれていたことと、小学生グループとの交流をほのぼのとした描写でたんたと紹介している記事に新鮮な感動を受けました。終戦時のソ連といえば、今までシベリヤでの悲惨で暗い捕虜抑留生活の話しか知らなかった私は、この記事を見て迷っていたロシア行きを決心しました。」と語られています。

(PP5)【志水通男さんのタンボフ訪問】

タンボフで行われる日本映画祭は日本大使館協賛で、日程は9月4日から4日間。志水さんは9月に初めてロシアへ渡航され、タンボフへモスクワ経由で行かれました。日本映画祭開催されるタンボフ郷土博物館へ露日協会支部長フェドートフさん、日本大使館参事官と向かわれました。ちなみにこの毎年行われるタンボフ日本映画祭のオーガナイザーが露日協会支部長フェドートフさんで、当協会設立のきっかけを作ってくれた2人目の方で、現・当協会副会長です。

(PP6)

会場前にはお父さんの写真が掲示されていたそうです。会場入口ホールで志水さんと68年前のお父さんの写真を送ってくださったエミリヤさん(78歳)との出会いのセレモニーをされ、彼女に渡す花束は露日協会が用意してくれたそうです。(PP7)日本映画祭開催のため地元テレビ局などが来ており、支部長と参事官がインタビューに応じられました。

(PP8)エミリアさんが当時10歳、志水實一さんと出会われたのは1946年(昭和21年)8月初めから約2週間だったそうです。お父さんの記録では、ロシアでの捕虜抑留生活は終戦後から2年間で最初の1年間はタンボフ市から北100kmのモルシヤンスク収容所におられました。森林伐採の厳しい労働をし、食事も満足でなかったので30kg体重が痩せ、仲間もたくさん亡くなったそうです。タンボフ市におられたのは、後半の1946年7月28日～1947年8月28日の1年間で、タンボフ市へ行った直後にエミリヤさんらと2週間だけ交流があったこととなります。当時、タンボフには他の国の捕虜もいたそうですが、だらしのない兵隊が多く、その点、日本の兵隊さんは礼儀正しく勤勉で明るくて友好的であったので、エミリヤさんらは強烈な印象として記憶に残ったそうです。そしてお父さんと出会ってから2週間後のお父さんらが別の場所へ移動する別れの日の1946年8月17日にエミリヤさんはお父さんから写真などを記念にもらったそうです。もらった写真を今になって親族に返す気持ちになったのは、エミリアさん自身が高齢になり、日本の方なら写真を大事にしてくれると思い、数年前から志水實一さんを捜されていたそうです。

(PP9)協会設立に至る経緯②フェドートフさんの日本愛、丹波愛

きっかけとなった人:フェドートフさん(現・当協会副会長)ーロシア・タンボフ在住の超親日家
これまで日本には7回ほど来日されています。

志水さんのタンボフへの訪問の後、あるときインターネットの地図で「タンボフ(Tambov)」を入力しようとしたとき、間違えて「Tamb..」で検索してしまい、結果、日本の兵庫県というところに Tamba 市があることを知り、自分が大好きな日本に自分の街・Tambov の名に似た街があることに感動し、タンボフ市と丹波市を姉妹都市提携しようという強い信念を持

たれたそうです。

それで実行されたことは「丹波への愛」の表現でした。(PP10)丹波市市民によるフレッシュモブ「恋するフォーチュンクッキー in Tamba (2013年)」へのアンサー・フレッシュモブとして「恋するフォーチュンクッキー in Tambov (2016年)」[<https://youtu.be/10wLvVRAJfk>]を企画され、さらに2017年、丹波市役所に直接(!)姉妹都市提携の依頼メールをしかもロシア語で(!!)送ってこられました。その当時、丹波市役所に勤めていた私の同級生が「ロシア語なら河津君しかいない」ということで私に話がきました。丹波市は当時、アメリカ・ケント市、オーバン市との姉妹都市提携に集中しており、しかも議会案件なのですぐにタンボフ市との姉妹都市提携は非常に難しいとのことでした。これまで、大学でロシア語を専攻としていてロシアにも2回留学した経験がある私は、日露の友好関係に寄与したい、丹波市への恩返しの気持ちがあり、「私がやります」と言いました。そして、まず草の根の民間交流として2018年、丹波・タンボフ交流協会を立ち上げ、当時は私一人でしたが、結果的に丹波とタンボフの絆のきっかけを作ってくださった志水さんをはじめ多くの方々のサポートがあり、今年3月には一般社団法人化にまで至りました。

【これまでの主要な活動】

タンボフ側の会員の方々と力を合わせて色々な活動を行ってきましたが、以下の3つのイベントをご紹介します。

(PP11)①美術展「第1回丹波・タンボフ展 in Tamba(2018)」開催(丹波市春日住民センター)
・丹波の芸術家たちの作品展示(参加芸術家: Jun Tamba、大谷由美子、吉竹恵理、山本法子、平出大)

・(PP12)タンボフの伝統民族工芸品、タンボフ市の美術学校生の風景画

・(PP13)特別講演会:

「ロシアの中心・タンボフの魅力」/V.フェドートフ(丹波・タンボフ交流協会副会長、露日協会タンボフ支部長)

「父とロシア人少女の絆」/志水通男(タンボフ・シベリア抑留者遺族)

「ロシア構成主義と鉄の彫刻」/Jun Tamba(塚脇淳、神戸大学名誉教授)

(PP14)②私の会長としてのタンボフ公式訪問。国立タンボフ工科大学とのパートナーシップ協定締結。タンボフにある日本人抑留者死亡者慰霊碑への献花。

(PP15)③日本大使館主催「日本祭 Japan Online Fest 2020」に参加。タンボフ市美術館との共同プロジェクト「3T: Tamba, Tambov, Talants」の実施。

(PP16)【ロシア・タンボフの人々との交流で私たちは何を得たのか】

日本人にとってロシア人はこれまでは「遠方の他人」でした。また、ロシア人にとっても日本人は

「極東(ロシア語で「遙か遠方の東」を意味する)の他人」でした。しかし、現実の地理を鑑みれば我々はずっと「隣人」でした。「隣人」であったからこそ近代国家になって以降何度も我々は衝突し、戦い合いました。それは両国を切り裂く歴史問題として残り続けています。しかし、それは両者の未来共存のための共有財産とすべきであると考えます。両国の英霊は双方の地に眠り、我々両者とも両国の英霊たちに敬意を表し、慰霊の言葉と花を捧げてきました。当協会が交流しているロシアの若者たちは両国の未来を担う世代です。彼らは日本の文化を知り、深く尊敬し、理解しようと努めています。我々日本人も両国の未来のために相手を深く知ろうとすることが大事ではないでしょうか。歴史は過去の為にあるわけではなく、未来を生きるために存在します。我々は未来を生きるべきです。そのために私たちの協会はより草の根の民間交流事業を進めていかななくてはならないと考えています。

最後になりましたが、我々丹波・タンボフ交流協会は、国際的な人道主義に基づき、プーチン政権によるウクライナへの侵略を非難し、生命の危険にさらされているウクライナ国民、そして戦争に反対するロシアの市民との連帯を表明いたします。

ちなみに、YouTubeで「丹波・タンボフ交流協会」検索していただくと私の公式チャンネルが出てきます。毎週、丹波市や日本文化について海外に紹介する動画を投稿しておりますので、チャンネル登録お願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。

[令和4年12月吉日 一般社団法人 丹波・タンボフ交流協会 代表理事兼会長 河津雅人]